

大坂廻りと東国の巡礼者

— 西国巡礼路の復元 —

田中智彦

- I. はじめに
- II. 基本的経路の復元
- III. 大坂廻りの復元
 - ア) 槇尾寺から大坂
 - イ) 四天王寺から葛井寺
- IV. 東国からの巡礼者の経路
- V. おわりに

I. はじめに

近年、近世の旅を旅行者の記録である道中記を用いて明らかにしようとする研究が盛んになってきている。それらは、ただ旅行経路を推定、復元¹⁾するだけでなく、旅行経路の時期的変遷²⁾、旅行者の出身地とその経路との関わり³⁾、そして旅行の対象に関するもの⁴⁾など多岐にわたっている。

ところで、近世の旅のなかで、伊勢参宮とならび最も人気を博していたのが西国三十三カ所観音巡礼である⁵⁾。西国巡礼は、近畿地方一円に点在する、33所の札所と呼ばれる聖地(寺院)を巡る巡礼である。この巡礼は平安末期に成立し、室町末期以後一般民衆の参加により発展したといわれ⁶⁾、近世に入ると最盛期を迎える。

西国巡礼も含め複数聖地を巡る日本の巡礼において、その聖地数は、例えば観世音菩薩ならば33⁷⁾、阿弥陀如来ならば48⁸⁾というように巡礼の対象によって決定している。そして巡礼者はそれらの札所を残る限なく巡拝するため、複数の札所間には巡礼者のたどる一定の経路が発達する。こうした巡礼者のたどる経路を巡礼路とみなすことができる。また、すべての札所と

それらを結ぶ巡礼路とで構成された完結した体系をなす一種の巨大な「聖地」⁹⁾を巡礼地¹⁰⁾と理解することができる。なお巡礼路には、巡礼地を形成する上で、性格の異なるものが含まれる。その一は巡礼者が札所間に著名社寺参詣などの寄り道をせず、札所のみを巡るための経路であり、巡礼地の根本的な要素という意味で基本的経路と呼ぶことにする。そして、それ以外の著名社寺参詣などを行なうものは、巡礼の大衆化の中で次第に派生的に生じてきたものと考え、発展的経路と呼ぶことにする。巡礼は札所、巡礼路、そしてそれらの総合体である巡礼地、さらに巡礼地を巡る巡礼者という主要素が相互に関連をもち成立する現象であり、巡礼を研究する上ではそれら個々の要素を明らかにしていく必要がある。特に巡礼路は、「巡り」「歩く」ということが重要な意味を持つ¹¹⁾日本の巡礼では、瑣末どころかむしろ巡礼の本質的部分にも関わってくるものである。

しかし、今日までのところ巡礼者¹²⁾や札所¹³⁾については研究は蓄積されつつあるが、巡礼路¹⁴⁾や巡礼地はほとんど等閑視されてきたといっても過言ではない。従来の研究では、札所間を結ぶ巡礼路の基本的経路について簡略に言及されてきた¹⁵⁾が、実際に巡礼者が利用した経路については個別事例として復元考察されている¹⁶⁾にすぎない。また一般論として、巡礼者は居住地から近い札所から巡り、順番にもあまり規範性はみられない¹⁷⁾、と指摘されている程度である。

この指摘からすれば、巡礼者の経路は全く個人的選択に任せられていたように考えられる。ところが複数の道中記を概観し、また巡礼者の

経路を個別に復元考察した研究を比較したところでは、巡礼者が札所を巡る経路はその出身地ごとに規則性があるように思われる。そして道中記のもつ性格から判断すれば、巡礼者の経路はただ個人的嗜好により決定されたものではなく、彼の居住する地域の経験的知識として伝承されてきたことを示している¹⁹⁾。つまり巡礼者の道中記を地域ごとに収集分析し、その経路を復元、比較検討していくことは、漠然と基本的経路の上に巡礼者を描くのではなしに、詳細に巡礼者の行動や利用した経路を明らかにし、より具体的な近世巡礼の実態を描くことになる。そして、さらに、巡礼者の出身地と経路の差異を明確にすることは、該当地域ごとの西国巡礼に対する認識を明らかにすることにもなるであろう。

以上の視点から、筆者は先に東国からの巡礼者の道中記を主資料として、西国巡礼路のうち愛宕越え¹⁹⁾、石山より逆打²⁰⁾と呼ばれる2つの発展的経路を対象に、それらと基本的経路とを復元した後、各経路と東国の巡礼者との関わりについて比較検討を行ってきた。本稿は視点を同じくしながら、和泉山地内の札所4番榎尾寺²¹⁾(和泉市)から河内の札所5番葛井寺(藤井寺市)間の巡礼路に焦点を当て、基本的経路と発展的経路大坂廻りの復元を行ない、東国の巡礼者²²⁾との関わりを考察するものである。

利用した資料は、版本として刊行されたガイドブックである巡礼案内記²³⁾、東国からの巡礼者の記録である道中記²⁴⁾、そして現地調査により認められる巡礼路沿いの道標²⁵⁾を用いた。

研究方法は、現地調査により巡礼路を復元し、次に道中記の分析を行ない巡礼者の経路を明らかにし、巡礼者がその経路を利用した背景について考察を行なった。

II. 基本的経路の復元

巡礼路は札所1番那智山から中辺路を利用し、札所2番紀三井寺、札所3番粉川寺を巡り、和泉山地の檜原越えを経て札所4番榎尾寺に至る。榎尾寺から札所5番葛井寺までは全体で7里²⁶⁾

の道のりがあり、榎尾寺の下りや和泉河内国境の天野峠(千石坂)、金剛寺から高向間の小さな峠で起伏がみられるほか、ほとんど平坦な経路が続き、際だった河川の渡渉もない(図1)。榎尾山上にある榎尾寺本堂からすぐ七曲がりを経て東榎尾川(音無川)の谷に下り、榎尾寺智積院前を通り、善正、南面利へと出て天野峠を越え、天野山金剛寺に至る。そして、現在の道路に沿う尾根道を通行し、高向に下り、上原、原を通過し、向野から石川に沿い走る東高野街道を利用して市、錦郡を経て富田林に向かう。富田林の町内を出てからは喜志、平、尺土、西浦を経て田畑の中を直線的に日本武尊陵付近まで北進し、古市古墳群の間をぬうように軽墓(軽里)を過ぎて葛井寺へと向かう経路である。榎尾寺から葛井寺までのこの道筋は「順礼街道」と呼ばれている。

巡礼案内記の中で最も詳細な記述を行う天保11年(1840)のものには、次のように案内されている。

「まきのを〆卅六丁道二里、すく天野、宿式軒、寺の前後ニ有、榎尾大門よりすぐニ行ハ大坂道、右へ行天野道²⁷⁾、一り餘行て、出畑村茶屋二軒、宿もする也、少し行、和泉河内界、天野〆五十丁道耆り、むかひ野、井野田やと云宿一軒、天野山金剛寺、真言宗、伽藍宝塔殊勝の所なり、大門の額ハ後白川院宸筆、右の山上ハ鎮守両大明神の社、境内通ぬけ街道なり、次ニ廣野村、是より横道所々へ道わけ有、上原村、野村、原村、此所まで茶や休所なし、不自由なり、向野〆同一里半、富田林、宿一軒、通筋三軒入込町ニ有、此耆り半の間も不自由也、市村、西郡村、西裏村²⁸⁾、軽墓村、富田林〆同二り、ふぢる寺、門前宿茶やあり、是より二りの間野道、支度所なし」

また、文政12年(1829)のものはほとんど同内容であり、「榎尾より藤井寺へすく道七里、▲榎尾より天野へ二り、せはた村茶屋あり、和泉河内の国境、▲天野より富田林へ三り、天野山金剛寺、真言宗、伽藍宝塔殊勝地也、大門の

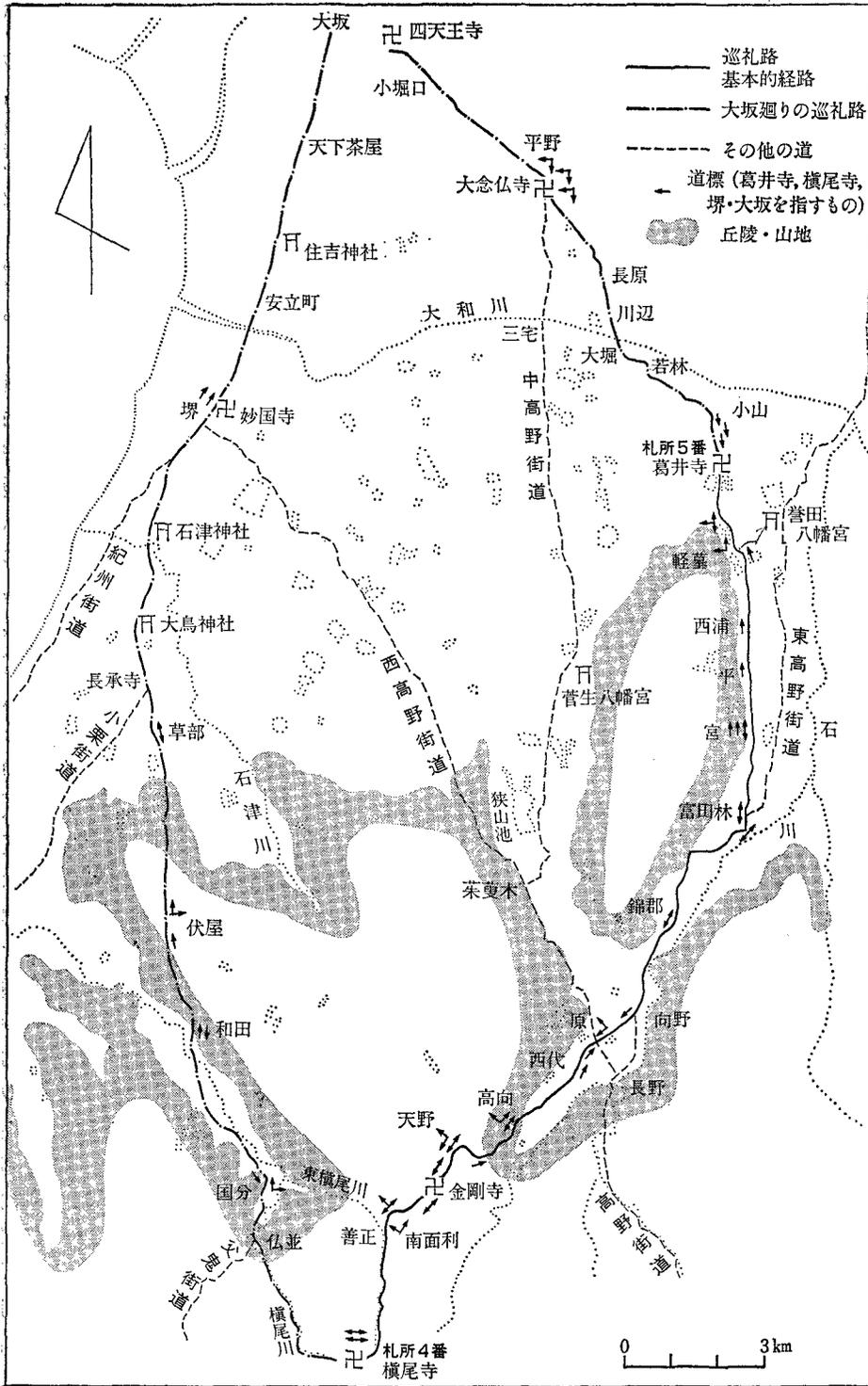


図1 横尾寺・葛井寺間の巡礼路

額へ後白川院宸筆、右の山上へ鎮守两大明神の社、境内通ぬけ街道なり、次ニ廣の村、是を横道所ニに道わけあり、▲富田林を藤井寺へニリ、これよりニリの間道支度所なし」と記している。

寛政11年(1799)の案内記は、次節で扱う大坂廻りには三丁半の紙面を割きながら基本的経路については半丁に「すぐ道七リ▲まきのを、ニリ▲あまの、天野山金剛寺、ぎやうぎのかいき、寺七十ヶ寺、三リ、▲とんだ林、ニリ△五番ふぢる寺」と至って簡略である。そして安永3年(1774)の案内記も「○まきのををすぐ道七リ、まきのをを天野へニリ、天野をとんだ林へ三リ、△天野山金剛寺、丈六大日如来、行基并開基、此間にさやまの池と云大池有、富田林を藤井寺へニリ」³⁰⁾と、非常に簡略に示している。ところが元禄3年(1690)の案内記になると、その理由はまったく不明であるが、大坂廻りだけを案内して榎尾寺から葛井寺への基本的経路を全く記載していない。

現地調査した結果では、榎尾寺から葛井寺間には比較的多くの道標が残存している。まず、榎尾寺本堂前には正面に「右ふじ為寺、左堺・大坂道」と刻まれた文久3年(1863)の道標があり、大坂方面からの参道石段上には「右ふし井てら七リ・さかい六リ・大坂九リ」「左こかわてら六リ・かうやさん七リ」と二面に刻まれた寛政4年(1792)の道標がある。この2つの道標は、前者が堺・大坂と葛井寺が別方向であると指示しているのに、後者は堺・大坂・葛井寺が同方向であると知らせており、一見矛盾する。しかしながら次節で扱う堺・大坂を経て葛井寺へと巡る大坂廻りの存在を想定するならば、不自然さは解消する。つまり石段上の道標は大坂廻りを利用して葛井寺へ向かう巡礼者向けのものであると考えられる。

榎尾寺から東榎尾川の谷に下る道筋、および谷沿い善正までは町石を兼ねた地藏尊が各所に敷設されており、調査時に確認できただけでも11体を数えている。これらの地藏尊は榎尾寺から下るに従って町数が増すように配置されている。そして南面利集落内に至れば、元禄17年

(1704)の「みぎふぢいてらみち、南無観世音菩薩、ひだりさかいみち」と正面に刻まれた自然石の道標があり、集落から河内和泉を結ぶ街道に出たところには「南まきのおみち」「東ふぢる寺、大峯山・いせ道」「西きしわだ・牛瀧山・さかい道」と三面に刻まれた文化10年(1813)の道標がある。

和泉河内国境をなす天野峠を越えた天野山金剛寺境内には2基の道標が認められる³⁰⁾。1基は鎮守下にあるもので「右まき尾山道」「左ふぢ井寺道」と二面に方向が刻まれた安政4年(1857)の大型の道標であり、他の1基は金剛寺境内北端にある、やはり安政4年(1857)の道標で、「右葛井寺道是ヨリ四里半」「左榎尾山道是ヨリ七十二丁」と二面に刻まれている。

なお金剛寺は、旅行家としても知られる貝原益軒の『南遊紀行』に「泉州榎尾寺へ通る道なる故、西国順礼の客、此寺に宿するもの多し」³¹⁾と記録されており、実際に摩尼院の雨戸裏側には巡礼者の落書きとおぼしき墨跡をみることができる³²⁾。

金剛寺からさらに進んだ河内長野市天野町には、「右ふぢ井寺是を百七十二丁」「左まきの尾てら是を八十丁」と二面に刻まれた安政4年(1857)の道標と、「右さかいみち、左まきの尾道」と刻まれた道標を兼ねた地藏尊がある。そして同市広野には、道路脇に移動されているが、「左ふじい寺道」と刻まれた宝暦12年(1762)の道標を兼ねた地藏尊があり、尾根を下った多向水落には、「すぐ大むね山、左藤井寺」「右あまの、まき尾道」と二面に刻まれた自然石の道標と「右ふぢ井てら」「左さかい」と刻まれた、いずれも年不詳の2基の道標がある。また、未確認だが、同市野作町には「ふじいてらへ」と刻まれた安政3年(1856)の道標がかつてあった。同市西代観音堂横には移動されている³³⁾が、「右ざい所道、左ふぢい寺道」と刻まれた享保4年(1719)の道標を兼ねた地藏尊が安置されている。

ところで西代観音堂より進んだ同市本多町には、年不詳の「右ふぢい寺、左さかい」と刻ま

れた地藏尊があるが、この道標の指示に従うと、「順礼街道」と西高野街道とが交差する原辻を通らない³⁴⁾。付近での聞き取り調査によると、この道標の示す葛井寺への道筋は新しいものである、と言われる。左の堺方向に進んだ原辻には嘉永元年（1848）の堺・大坂、槇尾寺方向を指す道標と年不詳の「右かうや、左ふじむ寺」と刻まれた、いずれも自然石の2基の道標が敷設されている。また、同市千代田南町の「順礼街道」と東高野街道との合流点には自然石の正面に「右まきのを、大道祖神守護、左かうや」と刻まれた年不詳の道標がある。この道標は葛井寺から槇尾寺へと向かう逆打ち巡礼者向けのものと考えられるが、槇尾寺の名称を記すところから推測して、この地点から葛井寺方面は富田林まで東高野街道と「順礼街道」が重複していたことを示している。さらに進んだ富田林市錦郡には年不詳であるが、「すぐふじむ寺」「右瀧谷山江十丁」「すぐ満き尾山」と三面に刻まれた道標がある³⁵⁾。

そして、東高野街道が富田林寺内町に入る向田坂上には「左ふしむ寺道」「町中くわへきせる、ひなわ火無用」「右まき尾・高野山道」と三面に刻まれた宝暦元年（1751）の道標があり、寺内町の出口にあたる北口地藏尊横には「左ふぢむ寺」「右まきのう寺」と二面に刻まれた年不詳の道標が設けられている。

富田林から葛井寺まで「順礼街道」は巡礼案内記が野道と記すように、水路沿いに田畑の中をほとんど直線的に北進する。富田林市宮町1丁目には「左ふぢむ寺道」と刻まれたもの、「左まきのを」「右ふぢむ寺」と二面に刻まれたもの³⁶⁾、そして「右ふぢむ□□」と刻まれた年不詳の3基の道標がある。また同市平町には比較的新しいと思われるが、年不詳の「すぐふじむ寺、一リ」と刻まれた道標があり、羽曳野市西浦には「すぐふ□□寺廿五丁」と刻まれた破損した地藏尊がある。さらに進むと古市古墳群にさしかかるが、同市軽里の竹内街道とのT字路には「ひだりふぢ井□、是ヨリ□□」と刻まれた道標があり、やや北の軽里3丁目

は正面に「右ふぢむ寺、左さかい道」と刻まれた天保4年（1833）の道標が設けられている。そして藤井寺市青山3丁目の溜池堤防上には三面に「すぐふじむ寺・大坂」「右さかい、左なら・郡山」「左まきの尾・かうや山」と、一面に文化11年（1814）死去の女性の辞世の句が刻まれた道標がある。また、今回確認できなかったが、藤井寺市野中には「すぐこんかう山・まきのふ山」「すぐふじむ寺・大坂」と刻まれた丙戌年の道標がかつてあった³⁷⁾。

なお、ここでは基本的経路が「順礼街道」の利用ということで論を進めてきたが、巡礼者は富田林より先も東高野街道を通行する場合があったらしく、羽曳野市古市6丁目の東高野街道二叉路には「右菅田・道明寺・京、左ふじむ寺・大坂」と正面に刻まれた元治2年（1865）の道標や、「右こん田道、左ふしい寺」と刻まれた道標を兼ねた地藏尊が建立され、同市菅田の菅田八幡宮の東の辻には年不詳の「左ふぢむ寺・大坂道」「右いせみち」「右道明寺・玉手山」と刻まれた道標が敷設されていることを付け加えておく。

Ⅲ. 大坂廻りの復元

巡礼路の発展的経路としての大坂廻りは槇尾寺から大坂（長町）³⁸⁾へと向かい、大坂市中を巡った後に、四天王寺から葛井寺へと至る。この間、槇尾寺から大坂、大坂市中巡り、そして四天王寺から葛井寺の3区間に分割できる。しかしながら、大坂市中巡りは個人的な関心による行き先の違いや込み入った市中の道筋を通行すること等で、一般的な経路として復元することが難しい³⁹⁾。そこで経路の分断になるものの、槇尾寺から大坂、および四天王寺から葛井寺の2区間の復元とする。

ア) 槇尾寺から大坂

槇尾寺から大坂までは8里32町あり、槇尾山からの下山路を除くと泉北丘陵でわずかな起伏が現れる程度であり、ほとんど平坦な道筋が続く(図1)。比較的大きな河川としては大鳥一堺

間で石津川が、堺一住吉間で大和川が現れる⁴⁰⁾が、橋が敷設されていた。大坂廻り経路は槇尾山を下り、槇尾川の谷に沿う参道を進み、仏並から父鬼街道に出て、国分で和泉河内を結ぶ街道と合流する。そして納花、和田、伏屋を経て、長承寺で小栗街道に合流し、大鳥神社、石津神社前を經由し、紀州街道と合流して堺の町中に入る。堺から先も紀州街道を利用し、大和川を大和橋で渡り、安立町、住吉神社、天神森天満宮を経て天下茶屋、今宮を通過して大坂に至る。この経路は大坂市中の人々が槇尾寺参詣に利用した道筋でもあり、「槇尾山道」とも呼ばれている。

収集した資料の中で最も古い元禄3年の案内記には「○横山江五十丁、此村中に川あり、泊よし、○宮崎江一里、此村泊よし、○池田江一里、此村泊よし、村中に川あり、此間上野原とてミな野也、○山田江一里半、此村泊あり、此間大とり村、観音寺村とてむら有、此大とり村に不動堂あり、○堺江一里半、○住吉江、是より津のくに、一里半……大坂一里半」と記載されている。

また天保11年の案内記は「槇尾の五十丁、横山、宿休、横山の卅六丁道三リ、山田、宿、横山村中ニ川有、宮さき、池田、川有、上野ヶ原といふ野あり、山田の半里大とり、宿休、大鳥の壱りさかひ、宿休、堺の三リ大坂、此所町廣く参所多く、有増、△大寺三村明神、△天神社、△水間寺⁴¹⁾、△妙国寺、そでつの名木有、△えびす嶋、町の出口大和橋を越、安立町ニ浪花屋といふ料理屋の庭に名高き黍あり甚見事なり、見物を乞ば心よく見する也、△住吉四社明神、社領二千百石餘、北門を出て神宮寺、住の江の濱は式三町西なり濱辺に廻船の標にする高燈籠あり、住吉新家、料理屋有、天下茶屋村、名物和中散、茶屋あり、今宮村、これ大坂入口長町、宿多く中程より北よろし」と記している。

また安永3年の案内記には「▲大坂廻り十三里、まきのをよこ山へ五十丁、よこ山山田へ三リ、上野ヶ原といふ野あり、山田の半里、大鳥のさかひへ一リ、堺の大坂へ三リ、

此所町ひろく参所多、せつ津、妙国寺そでつ、次に安立町なにはやの松、△住吉四社明神、塔あり、そり橋、ひめ松、次に天下茶屋」とみられる。

さらに文政12年のものでは「▲槇の尾の山田へ三リ、村中ニ川有、宮崎、池田、左りに信田の森見ゆ〇廻り也、▲山田の堺へ一リ半、大鳥明神、観音寺村、▲堺の大坂へ三リ、此所撰河泉境、町の間南北卅四丁、名物鍛冶文殊四郎、参詣所荒増記、▲大寺村三明神、▲天神社、▲妙国寺、蘇てつ有、△夷嶋町の出口大和川橋あり、▲安立町、難波や松見事、見物を乞ハ心よく見する也、▲住吉四社明神、社領二千石……▲住吉新家、料理やあり、▲天下茶や和中散、▲今宮村是大坂入口長町、日本ばし迄九丁……」と、記されている。

いずれの案内記の内容も大同小異であり、槇尾寺から大坂への経路のほかに、紙面を割き途中立ち寄るべき堺での参詣所や住吉神社を加えている。このほか寛政3年、寛政11年の案内記も記載が些か簡略になっているとはいえ、内容的にはほとんど変わらない。

現地調査の結果、この区間でもかなりの数の道標を確認できた。まず槇尾寺からは札所を離れるにしたがって町数の増加する、町石を兼ねた地藏尊が和泉市仏並まで各所に設けられている。かつては父鬼街道沿いにもこの地藏尊がおかれていたが、道路拡張などで移転させられ、現在仏並の仏並寺門前に44町から59町までを刻まれた9体と、破損した1体の地藏尊が安置されている。なお未確認ではあるが、仏並には「左さかい・大坂道」と刻まれた町石の地藏尊がある⁴²⁾。仏並から進んだ同市下宮町には、道路脇に移動されているものの、「右あまの山・ふちい寺道」「左さかい・大坂道」と刻まれた道標を兼ねた地藏尊が小祠の中にあり、同市国分の旧国分峠上には嘉永6年(1853)の槇尾寺と大峰山を指す道標がある。また、未確認だが同市平井町には槇尾道を指す道標を兼ねた地藏尊があり、同じく未確認だが同市和田町の南には槇尾寺、高野山を指す道標がある。そして同

町北の地点には子安地藏堂に移転させられているが、「右はさかい、左□□つみち」と刻まれたものと横尾山道を指す2基の道標を兼ねた地藏尊がある。

さらに進んだ和泉市伏屋町南には「右さかい・大坂道、左信田森道」と刻まれた道標を兼ねた地藏尊が小祠の中に安置され、やや北に進んだ地点には「右いせ・ふしる寺、左さかい・大坂」と刻まれた地藏尊がやはり小祠の中にある。また信田山を越えた堺市草部町には「すぐ堺・住吉・大坂」「右横尾山道」「左草部・不動□□」と三面に刻まれた文久2年(1862)の道標がある。そして長承寺で小栗街道と合流し、堺の入口で紀州街道に合流して堺の町中に入る。堺町中では紀州街道沿いの材木町東1丁目に「五丁南大ふじ」「左妙国寺」「右住よし・大坂」と三面に刻まれた安永6年(1777)の道標があり、宿屋町東に「左大坂」「右そてつ」「左ふじ」と三面に刻まれた嘉永5年(1852)の道標がある。また未確認ながら文殊橋東詰に「北住よし・大さか」と一面に刻まれた嘉永7年(1854)道標がある⁴³⁾。その先、堺から大坂までは紀州街道を利用するためか、道標は全く確認できなかった⁴⁴⁾。

イ) 四天王寺から葛井寺

四天王寺から葛井寺までは5里の道のりがあり、平坦な道筋が続く(図1)。途中、川辺大堀間で大和川が現れるが、架橋されていた⁴⁵⁾。四天王寺からは大和街道を利用し平野に至り、そこから分岐して長原、川辺、大堀、若林、小山を経て葛井寺に至る。

元禄3年の案内記は四天王寺から「○平野江一里、此所よき町にて泊よし、○大堀江一里、此所町一丁あり、泊よし、○小山江一里、此所よき町にて泊よし、○葛井寺江、河内、六丁」と、至って簡略な記載を行っている。そのほかの案内記では、安永3年のものが「大坂のひらのへ二り、御城あり三ヶ津一ツなれば参所、見物多し、△四天王寺……平野の藤井寺へ三り、大ほり、川なべ、小山村」と記し、天保11年の

ものも四天王寺から「南門を出て葛井寺道、摂津河内堺、小堀口、茶屋あり、桑津村、平野の五十丁式り、ふぢ井寺、宿茶屋、△大念仏寺、融通念仏宗の本山也、大堀村、長原村、茶屋あり、川那辺村、宿休所、大和川、仮橋、満水にハ舟わたし、小山村、宿茶や有、名物かち□や」と指示する。さらに文政11年の案内記も四天王寺から「南門へ出れハ藤井寺道、▲天王寺の平野へ二り、小堀口、茶や有、▲桑津村、▲平野の藤井寺へ二り、平野融通大念仏寺本山、開基法然上人、▲大堀村、△川辺村、大和川仮橋、満水にハ舟わたし有、▲小山村、横の門より入る藤井寺」と記している。

残りの案内記も記載内容に大差はないものの、元禄の一書を除いて、すべての案内記が大きな誤りを犯している。それは大堀の位置が不適切なことである。平野から大堀、川辺、小山と村名を順に掲げているが、実際には川辺の次に大和川を隔てて大堀となる。何故に、このような誤謬が踏襲され続けたのか、案内記における情報の不正確さという点で興味深い。本稿の主題を逸脱するので保留する。

現地調査したところでは、四天王寺から平野まで現在の国道25号線と重複する部分が多く、全く道標を確認できなかった。しかしながら平野町中には、3基の道標⁴⁶⁾を認めることができる。平野元町には「右ふちみ寺・大峯山・かうや山」「當社熊野権現・祇園宮」「右大坂」「すぐ天王寺・大さか」と四面に刻まれた寛政12年(1800)の道標があり、本町4丁目には「左なかの・住よし・さかい」「左ふちみ寺・大峯山上」「右八尾・志起山」と三面に刻まれた安永8年(1779)の道標があり、そして平野東1丁目には「すぐ道明寺、左志ぎ山」「右ふじいでら・大峯山上」「すぐ玉つくり、左天王寺」と三面に刻まれた弘化2年(1845)の道標がある。さらに未確認ながら、京町6丁目には「左ふちみ寺・かしへら道」「右大さかみち」と二面に刻まれた年不詳の道標がある⁴⁷⁾。

平野から大堀までは道標を確認できないものの、さらに進んだ藤井寺市小山の産土神社前に

表1 東国からの巡礼者の経路

No.	氏名	出身地	巡礼年	経路
1	依田 長安	甲斐山梨郡	享保6年(1721)	禰尾寺(3/13泊)——大坂(3/14・15泊)——葛井寺(3/16)
2	斉藤覚右衛門	武蔵入間郡	宝暦13年(1763)	禰尾寺(2/8泊)——大坂(2/9泊)——藤井寺(2/10泊)
3	——	奥州白河	天明6年(1786)	禰尾寺(4/1)——堺(4/2泊)——大坂……
4	——	奥州白河	寛政2年(1790)	禰尾寺(4/11)——堺(4/11泊)——大坂(4/12~15泊)——葛井寺(4/16)
5	山口 杉庵	安房安房郡	寛政12年(1800)	………大坂(7/18泊)………
6	小林儀兵衛	武蔵多摩郡	享和3年(1803)	禰尾寺(1/30)——大坂(2/1・2泊)——藤井寺(2/3泊)
7	小泉角右衛門	武蔵多摩郡	文化3年(1806)	禰尾寺——堺——大坂——葛井寺
8	益子廣三郎	常陸河内郡	文化9年(1812)	禰尾寺(2/13)——堺(2/13泊)——大坂(2/14・15泊)——葛井寺(2/16)
9	花塚 兵吾	下野那須郡	文政2年(1819)	禰尾寺(2/16泊)——大坂(2/17・18泊)——藤井寺(2/19泊)
10	細谷彦兵衛	上野邑楽郡	天保13年(1842)	禰尾寺(2/20)——堺(2/20泊)——大坂(2/21・22泊)——葛井寺(2/23)
11	福田 藤吾	下野河内郡	弘化4年(1847)	禰尾寺——堺——大坂(2日泊)——葛井寺

備考) No.1, 6は費用に関する記載。No.2, 6, 9の経路中, 札所名は葛井寺, 地名は藤井寺とした。

No.3の経路中, 大坂から先は記載欠。

典拠) 本文注24) ア)~サ)の道中記

は「右大峯山・ふしい□□・い勢□□」と正面に刻まれた天保15年(1844)の道標があり、小山の長尾街道との分岐点には「右はいせ・道明□・藤井□」と正面に刻まれた慶応3年(1867)の道標がある。そして同市岡には「右はふしい寺・かうや・よしの・はせみち」「左なら・かうり山みち」と二面に刻まれた元禄14年(1701)の道標が敷設されている。

IV. 東国からの巡礼者の経路

札所4番禰尾寺から札所5番葛井寺への巡礼路, 基本的経路と大坂廻りの2つの経路の復元を行ってきたが, 東国からの巡礼者はいずれの経路を利用していたのであろうか。次に, 東国からの巡礼者と両経路との関わりについて道中記を用いて考察したい。

まず, 巡礼者の利用した経路についてみれば, 入手した東国からの巡礼者11名の道中記はすべて大坂廻りの利用を示し(表1), それに対して基本的経路を利用したものの記録は現在のところ入手できていない。これらの巡礼者は, 甲斐, 武蔵, 安房, 上野, 下野, 常陸, 奥州など広範囲にわたり, しかもそのすべてが大坂廻りを利

用していることから, 大坂廻りは東国の巡礼者にとって巡礼路の基本的経路よりも一般的なものであり, よく利用されていたと考えられる。その上, これらの巡礼者の記録は享保6年(1721)から弘化4年(1847)までの長期間にわたるものであり, この間の経路の変化も認められないことから, 恒常的に利用されてきた経路ではないかと考えられる。そして元禄3年の案内記がこの経路を示していることや, ここには示さなかったが, 延宝8年(1680)の美濃からの巡礼者⁴⁹⁾が既に大坂廻りを利用していること, 大坂廻りに現れる道標にも元禄14年のものがあることなどから判断すれば, 大坂廻りは比較的早く元禄頃から利用されてきた経路ではないかと思われる。

それでは何故に基本的経路ではなく大坂廻りが利用されてきたのであろうか。しかも基本的経路では禰尾寺葛井寺間が7里であるのに, 大坂廻りでは13里32町と, ほとんど2倍の道のりを要してまでこの経路が利用されてきた理由はどこにあるのだろうか。巡礼者の記録をみると, 巡礼案内記が多くの紙面を割いて大坂廻りを案内していたのと呼応して, 大坂廻りの途中, 堺

表2 主な参詣所

No.	名称	記載道中記数
1	大鳥 大鳥神社	4
2	堺 妙国寺	7
3	安立町 難波屋笠松	6
4	住吉 住吉神社	6
5	大坂 高津神社	6
6	生玉神社	5
7	天満天神	4
8	大坂城	6
9	阿弥陀池	4
10	砂場	5
11	新町	4
12	道頓堀	6
13	四天王寺	6

注) 11種の道中記のうち、約3分の1に相当する4以上が記載のものを示す

および大坂での社寺名所旧跡に関する記載量が非常に多いことに気づく。道中記に記載された参詣所のうち主なものをまとめてみると表2となる。この表から大坂廻り巡礼者の記載が多いのは槇尾寺から大坂までであり、その先葛井寺までは少ないことが明らかとなるとともに、特に大坂市中での記載量が多いことがわかる。たとえば文化3年(1806)武蔵からの巡礼者の記録は以下ようになる。

「一 信太大明神御本社、一 奥院二社有あへのせい明旧跡也、一 信大森稻荷大明神、一 式社有 壹社くすのは社也、一 奥院石の堂前石どうろう有、一 此所狐穴有、一 さかい明国寺 此所二重塔有 大木なるそてつ有、一 此宿ニ何はやとてちや屋有 是ニかさ松と言松有、一 住吉四社大明神 是ノ津の国 かくらとう其外とう有、一 天王寺 大坂上町寺、一 大子様此外とうを、一 こうしんとう老丁ほとわきやけす やけてまたとうた、一 太い寺なり かりや、一 生玉明神前、一 東照宮御玉や 生玉本寺堂薬師如来、一 高津天王、一 大坂御城大手御門ノ京橋・天満はし・天神はし、一 西本願寺、一 座麻大社本地 稻荷大明神、一 新町

遊女町・同砂ばそばや いしう 十かく 有、一 南ば地善光寺、一 大坂ミなど、一 芝居場所多、一 其外堂宮多有、一 ひらの大念仏寺也」

確かに、巡礼案内記に示されている堺妙国寺の蘇鉄や難波屋の笠松、住吉神社が多くの巡礼者の道中記にも載せられ、大坂市中については四天王寺、生玉神社をはじめとする諸社寺、大坂城、はては芝居や遊女屋までが記載されている。ちなみに文政2年(1819)の下野からの巡礼者は、大坂で長町七丁目河内屋四郎兵衛方に170文で宿泊しながら、道頓堀の芝居を一人390文も支払って見物している。また、文化12年(1815)の常陸からの巡礼者は「同夜新町嶋の内の遊女屋夜ミせ見物仕申候処賑敷御座候へ共面白無御座候四ツ時宿へ罷帰申候」と記録している。

以上のことから、巡礼者の道中記を見る限りにおいては、大坂廻りはその名称の示す通り大坂見物を目的とした、西国巡礼の中でのいわば物見遊山の要素を達成するための経路であったと思われる。確かに、槇尾寺葛井寺間には難所と考えられる区間もなく、大坂廻りはそれを回避するための経路でもない。また槇尾寺大坂間および四天王寺葛井寺間には敢えてそこを訪れるべき著名社寺、名所旧跡もなく、それらを巡るための経路とも考えがたい。やはり大坂廻りは大坂での物見遊山を目的としていると考えてよいであろう。

しかし、巡礼者の記録の中には大坂廻りをただ単に物見遊山の目的とばかり断定できない、注目すべき記述がある。文政2年の下野からの巡礼者の記録には「妙国寺門前ニ菊一文字四郎源之包光金物の本家なり、但し菊一文字四郎かずあれ共源包光ハ一軒なり、これニテ御もとめ可被成候」とあり、常陸からの巡礼者の記録にも「菊一文字四郎鍛冶や見物かなもの相求申候 処かちや治衛門本家也文殊四郎数軒御ざ候間右次右衛門店ニ而必御求可然候」と記されている。また弘化4年の下野からの巡礼者の記録にも「御裏門前に、藤丸の印にて文殊四郎本元也。

夫より本通りへ出、かぢ町道具屋多し、鉄炮かぢもあり」と見えている。つまり巡礼者は堺において文殊四郎の製造になる刃物類に目を止め、土産品として購入しているのである。

土産品という点では、享保6年の甲斐からの巡礼者の記録には道中で購入すべき土産品のリストが載せられており、その中に「一 さめ、さかいニ而式本、外壺本……一 さかいニ而大にんじん調候而よし、江戸ニ而半両、国銀三十八匁、一 さめも同所にて」との記録がある。そして実際に購入した物品のリストには「一 乾金壹分八十六文(文殊小刀代、包丁外)、一 乾金壹分百七十六文源八駄賃、一 乾金壹両壹分上さめ壺本、一 乾金貳分中壺本さめ、一 五百文上小つか二本、一 二百三十文中小つか二本、一 八十文文殊小刀壺本、一 五十九文十文しばい夫、一 三十文はさみ壺丁」などが記載され、小刀、包丁、小柄など主に刃物類を堺で求めたと思われる⁴⁹⁾。

以上、甲斐や常陸の巡礼者の記録から推し測れば、かれらが刃物類を購入したのは、堺において偶然刃物類を購入したというよりも、当初から予定されていた行為と考えてよいであろう。記録には現れないものの、おそらくその他の巡礼者も堺で刃物類を土産品として購入したであろうし、それは当初から予定されていたのではなかろうか⁵⁰⁾。もちろん土産品を購入するために敢えて堺を経由して、次に大坂をめざしたとは、経路の上からは考えがたい。しかしながら堺での土産品の購入が当初から予定されていた行為であるとするならば、大坂廻りはただ大坂への物見遊山だけと断定できず、堺での土産品購入も一つの目的であったはずである。

しかも東国からの巡礼者は概して富裕な農民であると言われ⁵¹⁾、けっして貧しい乞食巡礼者ではなかった。ここに記録を残したのもそうした人々である⁵²⁾。したがって堺での土産品購入は記録を入手できた巡礼者だけの特例というよりは、むしろ東国の巡礼者にとっては一般化した行為であったと思われる。

以上の観点から考えるならば、東国の巡礼者

にとって大坂廻りはただ大坂市中の物見遊山的な目的に終始するのみならず、一方では堺における刃物類を土産品として調達するという側面もあったのである。

V. おわりに

本稿では札所4番槇尾寺から札所5番葛井寺までにみられる巡礼路に焦点を当てて、基本的経路と大坂廻りの復元を行ない、そして東国からの巡礼者の記録から、彼らが大坂廻りだけを利用していたことを示し、その実態と背景について考察を行ってきた。

その結果、大坂廻りは従来考えられていた物見遊山として大坂へと向かうという目的と同時に、堺での土産品、とりわけ刃物類の購入という面もあったと指摘できた。

しかしながら、巡礼者が堺で刃物類を購入し土産品とした背景には、巡礼者の出身地における刃物類生産やその需要、流通、品質などがあるものの、それらの点については本稿の主題を逸脱するのでまったく考察していない。今後は土産品の購入のみならず、新たな農産物の入手、知識の獲得など、巡礼と結び付いた広義の意味での流通という側面から考えていくことも必要であろう⁵³⁾。

最後に、先行する二稿をふまえて考察すれば、東国からの巡礼者は元禄頃から、物見遊山的な面をもち、愛宕越えや大坂廻りを利用し、また明和・安永頃からは琵琶湖の水難回避のために石山より逆打を利用するようになった⁵⁴⁾。こうした西国巡礼のある区間にみられる発展的経路は、時代が後になればなるほど、多数派生し複雑化する傾向がみられる。そして巡礼者はこれらの経路を利用し、西国巡礼を核としながらも、ただ札所を巡るだけではなく多数の社寺参詣などを取り込んだ壮大な旅の体系を形成している。

しかし、この結果はあくまで東国からの巡礼者の場合である。これとは反対に、物見遊山的でない信仰一筋な播磨の娘巡礼の事例⁵⁵⁾や成人儀礼として巡礼に出る山城物集女の事例⁵⁶⁾が知

られているが、おそらく彼らは発展的経路など利用しなかったであろうし、札所を巡る順序も東国の巡礼者の場合とは相違していたであろう。東国以外からの巡礼者の経路については、別途考察を必要とするものとする。

(神戸大学文学部)

〔注〕

- 1) たとえば『水戸市史』中巻2, 1969, 992~994頁には文化2年(1805)の『西国順礼道中記』の分析があり、千葉県『豊国村誌』, 1956, 536~541頁には元禄16年(1703)の六十六部の旅の記録が掲載されている。また島根県の『安田村発展史』上巻, 1935, 863~865頁に掲載された文政5年(1822)の『巡礼案内記』の経路もこのなかに含まれよう。
- 2) 近世と近代の伊勢参宮の経路を費用面から考察した村上義彦(「参宮日記からみた近代の伊勢参り」, 埼玉県立博物館紀要2, 1976, 14~24頁)などの研究がある。
- 3) 伊勢参宮のモデルルートと旅行経費を考察した小野寺淳(「伊勢参宮道中日記の分析——茨城県谷田部町大藤家文書を中心に」, 東洋史論2, 1981, 1~8頁), 東北地方からの旅の分類を行なった桜井邦夫(「近世における東北地方からの旅」, 駒沢史学34, 1986, 144~181頁), 岩鼻通明の出羽三山参詣に関する一連の研究(『出羽三山参詣道中記史料集』, 山形大学教養部, 1986, 「道中記にみる出羽三山登拝」, 東北生活文化論集6, 1987, 4~12頁, 「道中記にみる出羽三山参詣の旅」, 歴史地理学139, 1987, 1~14頁)などがある。
- 4) 旅行者の江戸での行動を考察した山本光正(「諸国人にとっての江戸——社寺参詣者を中心として」, 国立歴史民俗博物館研究報告14, 1987, 337~355頁)などがある。

このほか特殊なテーマとしては、親鸞上人の遺跡巡拝の道中記を扱った石崎直義(「越中人の二十四輩順拝の旅」, 歴史地理学紀要27, 1985, 151~172頁), 犬目村兵助の逃亡記を扱った増田広美(「甲州郡内騒動頭取犬目村兵助と『逃亡日記』その他」, 歴史評論338, 1978, 62~85頁), 被差別民の旅を扱った西木浩一(「近世武州における『長吏』の廻国順拝」, 人民の歴史学86, 1985, 25~16頁)などの研究がある。
- 5) このほか四国遍路や高野山詣, 本山詣, 金毘羅詣, 善光寺参り, 霊山登山などが近世の旅として行なわれていた(新城常三『新稿社寺参詣の社会経済史的研究』, 塙書房, 1982)。

なお, こうした目的地は, たとえば伊勢参宮, 西国巡礼, 高野山詣, 金毘羅詣, 善光寺参りが一つのセットとなり複合していたことが, 本稿で資料とする東国からの巡礼者の道中記から読み取ることができる。
- 6) 速水 侑『観音信仰』, 塙書房, 1970, 300~317頁。
- 7) 観世音菩薩は仏から執金剛神までの三十三身を現して衆生済度を行なうと説かれている(「妙法蓮華経」観世音普門品, 第二十五, 『大正新脩大藏経』第9巻, 大正新脩大藏経刊行会, 1925, 57頁)。
- 8) 阿弥陀如来は四十八の誓願を持つと示される(「仏説大阿弥陀经」巻七, 『大正新脩大藏経』第12巻, 大正新脩大藏経刊行会, 1924, 328~330頁)。
- 9) こうした考え方は真野俊和『旅のなかの宗教』, 日本放送出版協会, 1980, 62頁, および星野英紀『巡礼』, 講談社, 1981, 160頁にみられる。
- 10) 巡礼地という用語は一般に霊場と表記される場合が多い。しかし霊場には個々の聖地(札所)を指す場合もあり多義的で混乱するので避ける。
- 11) 「巡る」「歩く」ということの意味については, 五来 重(『巡る宗教』の辺路と巡礼, まつり36, 1980, 119~131頁)に詳しい。
- 12) 前田 卓『巡礼の社会学』, ミネルヴァ書房, 1971, また四国遍路に関しては星野英紀「近代の四国遍路(一)」, 大正大学研究紀要61, 1975, 287~304頁, 同「近代の四国遍路(二)」, 仏教と民俗12, 1976, 47~65頁などがある。
- 13) 札所寺院を巡礼という側面から対象とした研究は余り多くはないが, 元興寺文化財研究所『近畿地方を中心とする霊場寺院の総合的研究』, 1985などがある。
- 14) 巡礼路については一部分であるとはいえ, 環境庁や各自治体で実施する「歴史の道」調査保存の一環として復元が行なわれ, 報告書が刊行されている。和歌山県教育委員会『歴史の道調査報告書(I)——熊野参詣道とその周辺』, 1979 や, 岐阜県教育委員会『歴史の道調査報告書, 谷汲巡礼街道』, 1982 などがある。なお, 大阪府と兵庫県で

も「歴史の道」調査として西国巡礼路を対象に含める計画がある。

- 15) 前田 卓, 前掲書, 3~9頁。
- 16) 個別巡礼者の巡礼経路を復元, 分析した研究は多数あるとはいえ, それらはマクロスケールから行なわれたものであり, 巡礼者の見聞や経験などを具体的に検証しようとしても利用できないものが多い。さらに, 復元に際しても現地調査を行わず, 地図上で作業しただけのものが多い。一例を示すならば, 千葉県『長柄町史』, 1977, 436~441頁では文化7年(1810)の『西国順礼日記帳』を資料として旅行経路の分析がなされているが, そこに示された行程図には誤りが多い。
- 17) 星野英紀, 前掲書, 154頁。
- 18) 巡礼者の記録には, 渡船利用の可否など巡礼路についての情報, 宿屋の善し悪し, 土産物の良否などが記されている場合が多い。そのことは, こうした情報が知識として持ち帰られ, 伝え広められたであろうと予測させる。そしてその情報は後に巡礼に旅立つ者へ伝えられたはずである。一例を示すならば, 奥州白河からの天明6年の巡礼者の道中日記には, その4年後, 寛政2年の巡礼者の重ね書きがあり, 彼らがほとんど同じ経路をたどり巡礼を行なったことを知らせている。
- 19) 拙稿「愛宕越えと東国の巡礼者——西国巡礼路の復元」, 人文地理39-6, 1987, 63~76頁。
- 20) 拙稿「石山より逆打と東国の巡礼者——西国巡礼路の復元」, 神戸大学文学部紀要15, 1988, 1~23頁。
- 21) 札所4番は正式には槇尾山施福寺であるが, 本稿では槇尾寺という近世の通称を用いる。以下, その他寺名も近世の通称を用いる。
- 22) 巡礼者の納めた納札調査によれば, 西国巡礼者は武蔵, 山城, 長門, 肥前長崎の順に多く, 地域的には武蔵のほか下総, 下野, 常陸など関東地方, 山城, 伊勢, 摂津, 播磨など畿内周辺, そして長門, 周防, 石見, 安芸, 備後など中国地方西部から巡礼者が多かった(前田 卓, 前掲書, 128~157頁)。
- 23) 巡礼案内記としては下記のものを利用した。
 - ア) 養流軒一童子『三十三所西国道しるべ』, 元禄3年(1690), 国立国会図書館蔵。
 - イ) 『順礼道しるべ』, 安永3年(1774), 舞

鶴市立図書館蔵。

- ウ) 西川 某『西国順礼細見記』, 寛政3年(1791), (鷲尾順敬『国文東方仏教叢書』1-7, 東方書院, 1925), 525~586頁。
- エ) 風盃軒『順礼指南車』, 寛政11年(1799), 国立国会図書館蔵。
- オ) 沙門 某『新增補細見指南車』, 文政12年(1829), 国立国会図書館蔵。
- カ) 俣野通尚『西国順礼道中細見大全』, 天保11年(1840), 舞鶴市立図書館蔵。
- 24) 道中記としては下記のものを利用した。
 - ア) 依田長安「万覚日記」, 享保6年(1721), (国立史料館『依田長安一代記』, 東京大学出版会, 1985), 219~233頁。
 - イ) 齊藤覚右衛門『西国順礼道中記』, 宝暦13年(1763), 埼玉県立文書館蔵。
 - ウ) 「西国道中記」, 天明6年(1786), (川瀬雅男『西国道中記』, 1972)。
 - エ) 「西国道中記」, 寛政2年(1790), (同上)。
 - オ) 山口杉庵「西国順礼道中記抄」, 寛政12年(1800), (安房先賢偉人顕彰会『安房先賢遺著全集』, 安房同人会, 1939), 752~755頁。
 - カ) 小林儀兵衛「道中日記」, 享和3年(1803), (多摩郷土研究会『谷合氏見聞録』, 1974), 84~90頁。
 - キ) 小泉角右衛門「道中参所附」, 文化3年(1806), (東京都世田谷区教育委員会『伊勢道中記史料』, 1984), 51~73頁。
 - ク) 益子廣三郎「西国順礼道中記」, 文化12年(1812), (大子町史編さん委員会『西国順礼道中記』, 1986)。
 - ケ) 花塚兵吾「伊勢, 熊野, 金びら道中記」, 文政2年(1819), (湯津上村誌編さん委員会『湯津上村誌』, 1979), 217~242頁。
 - コ) 細谷彦兵衛「伊勢参官道中記」, 天保13年(1842), (邑楽町誌編纂委員会『邑楽町誌』上巻, 1983), 866~889頁。
 - サ) 福田藤吾「伊勢西国道中記」, 弘化4年(1847), (福田文次『伊勢西国道中記』, 1981)。

なお, こうした記録の史的価値は, ただ第三者に聞き, 書き記したというよりも, 実際に巡礼者が見聞した場合が多かったであろうから, まず

信頼してよいものであろう。

- 26) 道標は原則として巡礼路に沿うものに限定した。また巡礼路に沿うものであっても西国巡礼に関連しないものは除外した。
- 26) 里程は各案内記により数値がさまざまであるが、案内記の多くが示すものに従った。
- 27) このような記載は、暁鐘成『西国三十三所名所図会』嘉永6年(1853)にも「大門を出て直に行バ堺大坂道なり、右の方へ行バ天野山に至りて五番道なり、先榎尾山大門より七曲を過て善正村、南面利村を経て千石坂に至る」とみられる。ところが今日の寺院景観を思い浮かべれば、大門は榎尾川の狭い谷沿いにあり、そこから道が分岐するというのは考えにくい。
- 28) 西浦、軽墓、両村が錦郡村と富田林間に入り記載されているが、これは誤りである。西浦、軽墓は富田林葛井寺間に入らねばならない。
- 29) この記載では金剛寺富田林間に狭山池があると読み取れるが、狭山を経由すれば富田林に向かうことは不自然であるし、富田林を経由すれば狭山池から丘陵を挟んで隔たってしまう。したがってこの案内記の記載には疑問が残る。

なお、資料とした巡礼案内記6種類のうち、元禄3年のものを除く4種類が天野山金剛寺から富田林経由の道筋を案内しているものの、寛政3年のものだけは別の狭山経由の道筋を示している。それによれば「▲まきのをよりあまのへ二里、門前は茶やばかり、宿は寺にかすなり、▲天野よりさやまは二里半、△天野山金剛寺、丈六日如来、行基菩薩開基、此間にさやまの池といふ大池有。▲さやまより藤井寺へ二里半」と記されている。確かに狭山を経由して葛井寺へと向かう経路が存在していたことは、巡礼絵図(『西国順礼細見絵図』、文政4年(1821)、紀三井寺蔵)の中にもこの経路を描写したものがあることから明らかである。

現地調査を行なったところでは、金剛寺から谷沿いに北に向い下里、大野を経て、中高野街道を利用し、美原町東野の菅生神社入口まで進む。この地点には鳥居と慶応2年(1866)の「すぐ平野絵本山・大坂天王寺、右藤井寺・菅田八幡宮・道明寺」「すぐ三日市・高野山」「當社菅生天満宮」と刻まれた道標がある。菅生神社から巡礼路は中高野街道と分岐し東多治井、河原城を経て仲哀天

皇陵西を通り葛井寺に至る。この間、東多治井のバス停に、かつては地藏尊の台座でもあったのであろう。角柱に「左ふじい寺」と刻まれた宝暦12年(1762)の道標がみられる。

しかしながら、時期も違う案内記の多くが富田林経由を示していること、また狭山経由の道筋に現れる道標は葛井寺を指すが榎尾寺を指すものがないこと、そして金剛寺付近での聞き取り調査でも大野方面へ巡礼者が向かったことを明らかにしがたいことなど、狭山経由の経路は巡礼路の基本的経路としては疑問点が多すぎる。したがって狭山経由の経路も巡礼路であることは否定できないものの、基本的経路であるとは認めがたい。

- 30) 以下、河内長野市内の道標と巡礼路については、1981年に市の実施した道標調査の結果、ならびに「歴史の道」調査の結果を市教育委員会橋本享氏に御教示いただいた。
- 31) 貝原益軒「南遊紀行」〔高野義夫『日本紀行文集成』第1巻、日本図書センター、1979、737頁〕。
- 32) 筆者が1983年同所を訪れた際発見した。その文言は「泉州谷川村、石屋□□□、同清七、同長七、同行三人」となっている。
- 33) この道標を指し示す方向から判断して、かつて交差点の東北角にあったと推測できる。
- 34) 野田知義『西国三十三所方角絵図全』、享保19年(1734)、神戸市立博物館蔵、には巡礼路が西高野街道と交差する原辻を通るように描かれている。
- 35) 富田林市域の道標および巡礼路については、富田林市史編さん室玉城幸男氏に御教示いただいた。
- 36) この道標は現在民家の垣根下に引き抜かれているが、聞き取り調査によると、電柱敷設のために引き抜かれたものであり、旧地も明らかである。
- 37) 「大坂府下の道標2」、大阪市立博物館紀要5、1972、27頁。
- 38) 巡礼案内記は大坂の入口を長町と示し、次節で扱う巡礼者も長町七丁目の河内屋四郎兵衛や河内屋庄右衛門、八丁目の河内屋嘉兵衛などを宿としている。
- 39) 大坂市中での巡礼路の復元は難しいものの、巡礼者は宿から案内人を依頼し市中巡りをしており、その経路は宿ごとに一定していたらしい(内田九州男「観光のメッカ大坂」(一)(二)、観光の大坂441・442、1988、8～9頁、および同氏の談)。

- 40) 大和川の付け替えが実施されたのは元禄17年(1704)であるから、元禄3年の案内記の記載は考慮しなければならないが、それ以外の資料はさしつかえない。
- 41) 堺の町中を南からたどると住吉神社頓宮、大寺三村明神(開口神社)、天神社(菅原天満宮)、妙国寺と巡ることができる。しかしながら水間寺は、堺ではなく貝塚市水間にあり、なぜ堺町中の記載に紛れ込んだのか不可解である。
- 42) 以下、堺までの道標については、大坂府教育委員会で一昨年実施した「歴史の道」調査に基づく。これらの資料は府教育委員会松村隆文氏に御教示いただいた。
- 43) 「大坂府下の道標2」、大阪市立博物館紀要5, 1972, 45頁。しかしながら現地調査したところでは、大阪市立博物館の報告とは違い、「右家原文殊道」「左万代八まん・かうや山道」と二面に刻まれた嘉永6年(1853)の道標しか確認できなかった。
- 44) 現在では確認できないが、長町七丁目の河内屋庄右衛門が配布した引札(大阪城天守閣蔵)には、長町七丁目の辻に「右藤井寺道」「左天王寺道」と二面に刻まれたかなり大型の道標が描かれている。河内屋庄右衛門は東国の巡礼者も多く利用した大規模な旅館であり、この道標の存在はまた大坂廻り巡礼者を意識したものであると考えられる。
- 45) 宝暦13年の巡礼者の道中記には「大和川舟渡し、此川摂州河州国堺也」との記述があり、当時は架橋されてなかったことがわかる。
- 46) なお、このほか平野全興寺境内には、慶応2年(1866)の葛井寺、高野山、天王寺など二面に方向を刻まれた道標が移転させられている。
- 47) 「大坂府下の道標1」、大阪市立博物館紀要3, 1971, 41頁。
- 48) 中野 某『巡礼通考』、延宝8年(1680)、国立

公文書館蔵。

- 49) 葉種をはじめとする唐物や、出歯包丁、煙草包丁などが堺の特産物であった(堺市役所『堺市史』第4巻, 1930, 461~511頁)。
- 50) 天明6年奥州白河からの巡礼者の記録には「宿ニ而庖丁類色々見せ、或ハ帳面等ヲ出シ、先々も相調候様杯申候へ共、大方ハ品不宜、可心得也」とあり、刃物類購入に難色を示している。しかし、この記載によれば、堺において巡礼者が刃物類を求めた背景には、売り手の側でも積極的な販売策が取られていたと考えられる。
- 51) 前田 卓, 前掲書, 145~147頁。
- 52) 資料としたすべての巡礼者の身分が明らかになるわけではないが、甲斐からの巡礼者は長百姓であり、常陸からの巡礼者も庄屋である。
- 53) 旅行者が新たな農産物の流通に一役かう、という話は各地で耳にするところだが、中世末の巡礼者には既にこうした側面があった(滋賀大学経済学部史料館『菅浦文書』下巻, 1968, 34~35頁)。
- 54) ここに示した三経路以外に、東国の巡礼者が利用した発展的経路は高野越え、兵庫廻りなどがあるが、それらについては別稿に譲ることとする。
- 55) 山田正雄『播州黍田村農民の歴史』、太陽出版, 1980, 345~347頁。
- 56) 前田 卓, 前掲書, 4頁。

〔追記〕

本稿作成に際して、富田林市市史編さん室玉城幸男氏、大阪城天守閣学芸員内田九州男氏、同北川央氏、河内長野市教育委員会橋本亨氏、大阪府教育委員会松村隆文氏に御協力いただいたことをここに記し、感謝の意を表します。

本稿は神戸大学に提出した博士論文の一部分を基礎とし、その骨子は1987年12月の兵庫地理学会例会会で発表したものである。

OSAKA ROUTE FOR TOGOKU PILGRIMS; RECONSTRUCTION OF
THE SAIKOKU PILGRIM ROUTE AROUND THE WESTERN PROVINCES OF JAPAN

Tomohiko TANAKA

Studies on the travellers' records during the Edo era for the investigation of various and lively facts or matters are recently increasing. As for travelling place at that time, Ise Jinngu Shrines and Saikoku 33 Kannon-temples Pilgrimage were most popular, and they absorbed a lot of people from all over Japan.

By the way, Japanese Pilgrimages were remarkably characterized by visiting and circulating a certain given sacred places, instead of visiting a well-known sacred place. Therefore a regular course, so-called pilgrim route, had fixed during the Edo era, which was a significant and essential factor in Japanese pilgrimages.

In the result of the pilgrim popularization during the Edo era the course of expanded or extraordinary route for the famous and well-known temples, shrines, and historical sites was derived from the original or authorized course. In spite of its importance, we have few knowledge about pilgrim routes at that time.

This study aims at the reconstruction of two pilgrim routes, one of which was original or authorized route and the others expanded or extraordinary route, so-called Osaka Route, both in the course between Makinoo Dera Temple on Mount Makio and Fujii Dera Temple in Fujii Dera city. By some guide-books published during the Edo era, and Togoku pilgrims' travel diaries.

Original or authorized route, the "Pilgrims' way" took seven Ri (about 27.3km) from Makinoo Dera Temple to Fujii Dera Temple. It ran down from the temple to the valley of Higashi Makio River, through the precinct of Kongo Ji Temple in Amano village and crossed over Nishi Koya Highway (the route to Mount Koya) at Hara Crossing. In this section we can observe eleven mile stones (Choseki) carving on Jizo Bosatu statues (Ksitigarbha) located between Makinoo Dera Temple and the humlet of Zebata, and thirteen guide stones (Dohyo) pointed the direction to Fujii Dera Temple, nine of them are dated between 1704 and 1857, and four undated. From Hara Crossing to Fujii Dera Temple, this route had the junction of Higashi Koya Highway (the route to Mount Koya) at Mukaino village, then ran directly from Tondabayashi town to the temple along the narrow irrigation canals. In this section we can observe eleven guide stones (two stones dated in 1751 and 1831, another undated).

On the other hand Osaka Route took thirteen Ri and thirty-two Cho (about 54.5 km) from Makinoo Dera Temple to Fujii Dera Temple. It ran down the valley of Makio River for Sakai and Osaka. This route had the junction of Chichioni Highway (the route to Chichioni) in Butsunami village, of Oguri Highway (the route of the medieval legend of Oguri Hangan) in Choshoji village, and, of Kishu Highway (the route to Kii Province) in Sakai town. There are seven guide stones pointed the direction to Sakai or Osaka, and

two guide stones reversely pointed the direction to the temple. Most of them are carved on Jizo Bosatsu statues made of Izumi sandstone, usually undated.

Osaka Route starts at Sitennoji Temple in southeast Osaka, and ran for Fujii Dera Temple through Hirano village. It has been verified by six guide stones showing the direction to the temple (all dated between 1701 and 1867).

The eleven travel diaries by Togoku pilgrims between 1721 and 1847 under our investigation, shows the route of so-called Osaka Route. According to them, these pilgrims came from Kai, Musashi, Awa, Kozuke, Simotsuke, Hitachi, and Oshu provinces, so-called Togoku area (eastern Japan), so-that it seems to be a usual route for them passing through Osaka Route. The longer distance journey did not prevent peoples of Togoku pilgrims to choose the course including Osaka, a brilliant fascination of the great city. Besides this reason, another remarkable reason are found on their diaries, which shows to be expected by the pilgrims to buy a sort of blades or knives as souvenir, produced at Sakai town. The Sakai knife was well known to all countries by its good quality during the Edo era.

It was by the fascination of the great city and by buying some blades or knives in Sakai for the Togoku pilgrims to take Osaka Route.